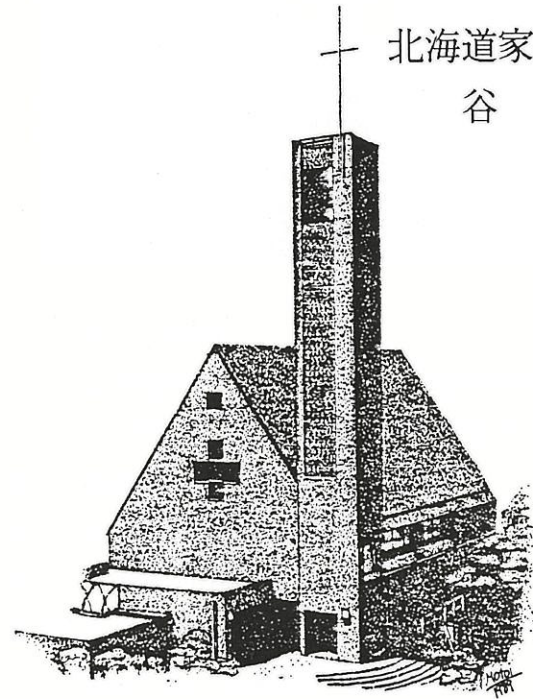


チャペル ブックレット No.2

— 1989 春の宗教週間 講演記録 —

心を問い続けて

北海道家庭学校 校長
谷 昌 恒



名古屋学院大学 宗教部



谷 昌恒先生のご紹介

たにまさつね先生は、社会福祉法人 北海道家庭学校の校長をしておられます。1922年のお生れで、東京大学理学部で地質学を専攻、戦時中も徴兵猶予の特権を与えられて研究生生活を送っておられましたが、敗戦直後の混乱の中で、戦災孤児たちに出会い、研究生生活を投げうって、孤児らと共に、福島県の山奥に「堀川愛生園」を設立されました。その後、社会保障研究所に勤務され、1969年、北海道家庭学校から招かれ、五代校長として現在に至っておられます。

1989年5月16日、本学宗教部主催の春の宗教週間で講演していただきました。

北海道家庭学校について

北海道家庭学校は、シンナー、万引き、暴力、窃盗などさまざまな問題を起し、「不幸に負けた」少年たちを受け入れ、立ち直らせる「教護院」です。全国に57施設ある教護院の中では、唯一のキリスト教主義にもとづく私立の男子教護院です。

北海道家庭学校は、留岡幸助牧師が1914（大正3）年、網走の近くの遠軽町の国有林10km²の払い下げをうけ、厳しく豊かな自然の中で、温かな家庭と労働と祈りを通して、心に傷を負った少年たちを立ち直らせる目的をもって創設されました。

収容定員は85名、約30名の職員が起居を共にしています。434ヘクタール（130万坪）の広大な土地に下の写真のような礼拝堂のほかに、本館、講堂、体育館、食堂、博物館、寮舎などがあります。家庭学校を巣立っていった人たちは、創設以来、1700名をこえています。北海道紋別郡遠軽町留岡34番地にあります。



1919（大正8）年、望ヶ丘に建てられた礼拝堂

豊かな自然の中で

私どもの家庭学校を創立した留岡幸助（注①）という先生は「教育は人だ」といいました。良い教師がいれば良い教育活動ができる、良い教師のもとで深い教育活動ができる、と考えたわけです。しかしそれにも増して大きな力は「自然」だと考えたのです。

自然が人間に与える感化影響は、計り知れないものがあります。自分は自然をふんだんに取り入れた学校を作る、留岡はそう考えていました。

ですから留岡は、1914年、ちょうど今から75年前に、国から一千町歩、という大変広い土地の払い下げを受け、北海道の遠軽（えんがる）という所に「北海道家庭学校」を創立しました。（注②）

まさにふんだんに自然のあるところ、自然が人間に与える感化影響を抜きにして教育を語ることはできない。自然と人間が仲良くすれば自然はいつまでも美しく、人間は心やさしく謙虚だ。そう考えていたわけです。

そして私達は今でも自然の中で、自然を相手にして色々な労作をしています。けれども毎年違うのです。いっしょうけんめい骨折って、大変順調なときはたくさん実りますが同じようにいっしょうけんめい骨折っても、気象条件の悪いときは、さっぱり収穫がありません。



注① 留岡幸助（とめおか こうすけ）

牧師、社会事業家、家庭学校の創立者。1864（元治元）年、備中（岡山）高梁に生れ、18才で洗礼を受け、同志社神学校を卒業し牧師となる。神学校在学中より、監獄、警察、遊郭、病院、軍隊などがある社会は根本で病んでいると見ていた。よい教育とよい家庭が人を育てる、しかし今の家庭は下宿屋にすぎないという。

金森牧師に請われて、北海道の監獄の教諭師となり、アメリカの監獄で研修をつみ帰国。巢鴨監獄の教諭師、警察監獄学校教授となる。

犯罪防止の根本は、「不良少年」の教化こそ先決と、巢鴨に「家庭学校」を1899年に創設、その分校として1914（大正3）年、北海道家庭学校を開設、自然と労働と教育と祈りによる少年育成の理想境づくりに着手した。1934（昭和9）年没。

1961（昭和36）年、地元民の提案で、学校周辺の地名を「留

収穫のいっぱいあるときは、自然は恵みに満ちみちている、本当にそう思って、感謝するのです。しかし同じように労を払って、全く収穫がないと、自然というのはなんと厳しいものだと、恨みたくもなります。

この自然の豊かさ、自然の恵み、そして自然の厳しさ、そういうものを知っていると私達は謙虚にならざるをえないと思います。

自然と人間が敵対関係に入りますと、たちまち自然は荒廃し、人間は退廃します。とりわけ傲慢になります。(注③)

現代の社会は、まさに人間と自然が深い敵対関係にはいて、自然が荒らされ人間が傲慢になっているのではないのでしょうか。

教育は祈りである

今日私は、はじめてこの学院にまいりましたが、おそらく日本の大学の中で、これほど豊かな自然のなかにある学院はあるまいと思いました。

「自然を離れて教育はない」と考えていた北海道家庭学校の創立者留岡幸助が、もしこの学院の環境をみる機会があったなら、大いに「我が意を得たり」と思うことでしょう。

そして彼は深い原始の森を切り開きながら北海道家庭学校を創るわけです。1919(大正8)年、創立から5年、原始林の中に、もちろん木造ですが大きな礼拝堂を造ります。

(注④)

岡」と名付けられた。「留岡幸助著作集」「留岡幸助日記」がある。高瀬善夫著「一路白頭ニ至ル」(岩波新書)にその生涯がくわしく描かれている。

注② 北海道家庭学校
2ページの説明を参照。

注③ 留岡は「教育は自然と人間の協同作業である」という。自然が母であり、人間が父である。この両親がそろってはじめて人間らしい教育ができると考えた。大正初めの東京は、留岡の目にはすでに都市公害に犯されていた。非行少年を生み出す主な原因は、家庭の崩壊とともに自然を失った都市文明にあるとみた。「土を尊べ」と留岡は主張した。

注④ 礼拝堂の写真は、2ページに掲載。

教育は祈りだというわけです。祈りというのは、目に見えないものを恐れる思い、目に見えないものにひれ伏す思い、教育にこれを欠いてはならないというわけです。

繰り返しますが、教育の基本は祈りだというのです。

学生諸君はあまりそう思わないかもしれませんが、家庭教育の基本も、学校教育の基本も、祈りだと私は思うのです。

もちろん宗旨は違いますが、昔の日本の家庭には必ず一軒の家に仏壇があったり、神棚があったりしました。

我々の命は目に見えないずっと昔から伝わってきて今あるのです。我々が突然この地上に出てきたわけではありません。そして我々の命は遠い将来に向かって流れていくのです。

今我々は複数で家族を構成していますが、その一人一人はその流れのヒトコマです。

そういうことに対する深い恐れがあって、はじめて家庭の平和があるのです。家庭の愛があるのです。家庭の充実があるのです。

家庭教育の基本は祈りだと留岡はそう考えました。

そう考えた彼が1919年、森の中に建てた大きな礼拝堂——それは今も町の人々から「森のチャペル」と呼ばれて大へん親しまれていますが——大きなチャペルを中心にして生活しています。それこそが私どもの北海道家庭学校の教育の象徴なのです。

ここ名古屋学院大学も、大変近代的な建物

ではありますが、森のなかに大きなチャペルがあります。

「自然」と「祈り」その二つを教育の中心にする、やはりどこかでつながっているな、と感じています。

来たくて来た子はいない

ただ中味は全然違うのです。北海道家庭学校、それは1914（大正3）年に建てられた時は、「感化院」といわれました。今は「教護院」です（注⑤）。いたずら坊主ばかりがいるのです。

今日の講演会のチラシにも「シンナー」をやったり、「万引き」をやったり、「窃盗」をやったり、どうにしようのない子どもたちを預かっている、と書いてありましたが、家庭学校にはそんな子どもたちばかりがいます。

ここ名古屋学院大学に集っているのは、志をもってここで学ぼうと固い望みを抱いて、入学された学生さんたちでしょう。中味が違うというのはそういうことです。

私どもの学校は、来たくて来た子はいないのです。警察が行けというから来た、という子どもや、裁判所が行けというから来た、という子どもです。また児童相談所が行けというから来た、という子どももいます。

自分の意志で来た子は一人もいません。みんなイヤでイヤでしょうがないけれど、来ざ

るをえなかった子どもばかりです。

そんな子どもたちと自然のなかで、祈りの心を覚えたい、そして教育活動を展開したいのです。

志をもって集っている諸君、この恵まれた自然とこの礼拝堂のなかで、色々なことを学んでほしいと思います。

家庭学校に来る子

私どもの北海道家庭学校のことをお話ししましょう。

この地方では、名古屋市立玉の川学園、愛知県立愛知学園という教護院があります。それらと同じだろうと思いますが、私のところは85人ほどの子どもがいます。1年に約40人の新しい子どもがはいてきます。そして年間約40人が出ていきます。ですから単純に計算しますと、2年ぐらいでみんな替っていくわけです。もちろんこれは平均でして皆が2年いるわけじゃありません。

中学3年の2学期、慌ただしく私のところに来ましてから、高校入学のために一生懸命勉強して、次の年の3月に、ほとんど半年しかいないで早々に自分の道を切り開いて、出ていく子どももいます。

また、いま私のところには中学1年のチビスケがいますが、彼は小学校3年のときに来ました。もうまる4年近いのです。義務教育年令の子どもは、家に帰しても、ちゃんと学

注⑤ 感化院と教護院

感化院とは、1900（明治33）年感化院法が制定されたのにもとづいて、各都道府県に設置された児童の感化救済施設。1933（昭和8）年、少年保護法の制定まで存在した。

留岡が東京に家庭学校を創設したのは、感化院法ができる前年のことである。留岡は「ここは不良少年の収容所だと、わざわざ世間に知らせるような名称は、教育の原則に反する」として感化院と呼ぶことを嫌い、「家庭学校」と名付け、家庭的環境の中で指導した。

教護院は、1947（昭和22）年、児童福祉法の制定により設置された児童福祉施設の一つ。全国に57箇所あり、豊かな自然と家庭的な温かい雰囲気の中で指導されている。

校に通わせてもらえるという見込みがないと帰せないのです。このチビスケの家庭は「どうも学校には通わせてもらえない」そういう判断があって、彼はたぶん中学を卒業するまで私のところにいることになるだろうと思います。すると彼は7年間ここにいることになります。

そんなふうによく出ていく子もいるし、ずっといる子もいます。

また一般の学校のように、4月に一斉に入ってきて3月に出ていくというわけではありません。家庭内暴力があったり、校内暴力があったり、盗みがあったりして、事故を起した時にポツンポツンと入ってくるのです。

望ヶ丘の礼拝堂で

そういう学校の流れのなかで、日曜日ごとに礼拝をしています。もちろんみんな集ってきます。1年間で50回ほど礼拝があるわけです。先ほど言いましたように、1年に40人ぐらいの子どもが来ますから、多くの日曜日の礼拝に、はじめて礼拝堂に入ってきたという子どももいます。

イヤでイヤでしようがなくたってはいつか子どもが日曜日になって、仲間から「今日は礼拝だよ」といわれて、どんな気持ちで礼拝堂に集ってくるのでしょうか。その礼拝堂は「望ヶ丘の礼拝堂」と呼ばれているように、少し小高くなった丘の上にあります。天井が高く

て、少し薄暗い礼拝堂です。そして固いベンチに座ります。

「これから礼拝が始まるのか、礼拝って何なんだろう、家庭学校ってキリスト教か、オレ知らなかったよ、神様っているのか、先生は信じてるのか……」おそらくその少年は落ち着かない不安な気持ちでそこにいるでしょう。

「神様なんていないよ、いるもんか、ボクの2才のときに父さんは死んじゃって、母さんは5才のときに行方不明なんだ。そのあとずっといいことなんて何もなかったよ。もし神様がいるのなら、なぜボクみたいに不幸な子がいるんだ。神様なんかいるもんか。ボクは神様なんか信じないよ」その少年はそう思っているかもしれません。

その少年が私にそう聞いたら、その質問にはおそらく、私は何も答えられないでしょうが、こう言うことはできます。

「そうだよな、神様や仏さまがいてどうして君たちみたいな不幸があるのだろう。だけどこの家庭学校に学んで、森が美しいと思わないか？自然が美しいと思わないか？」と。

人間ひとりひとり違う

家庭学校は町の人が「森の学校」と呼んでいる、深い森のなかにあります。

森がきれいだと思いますか？なぜ森は美しいのだろう？

ここでもこうして礼拝堂から外を眺めますとたくさんの木々が見えます。私どもの礼拝堂はもっと深い森のなかです。

太い檜の木があります。その脇に白いスラッとした白樺の木があります。その向うにはまっすぐに伸びたトドマツがはえています。

木が1本1本違うのです。草の1つ1つが違うのです。花もそうです。赤い大きな花もあるし、小さな小さな白い花もあります。山もみんな違うし川も違います。

そういう違いが1つ1つあってそれが全体に集って、ああ森は美しいな、と思うわけです。

そのように人間も一人一人違います。大きな人もいれば小さな人もいます。強い人もいれば弱い人もいます。美人もいるし、いろいろです。

そして強い人が弱い人のことをいたわってあげる、大きな人が小さな人に優しくする、なんて人間の社会は美しいんだろうと思います。

もし人間の社会を醜いと思うなら、それは強い人が威張っているし、力のある人が、弱い人をいじめているんです。そういう姿を見れば人間の社会は醜いと思うんですが、一人一人みんな違って、みんなが力を出しあって生きていけば人間の社会は美しいと思うのです。

家庭学校の図書室に糸賀一雄（注⑥）という先生が書かれた「福祉の思想」という本が

注⑥ 糸賀一雄(いとが かずお)
1914(大正4)年、鳥取市の生れ。

あります。中学の上級生なら読める本です。この糸賀先生という人は、私よりもずっと先輩だったのですが、京都の大学で宗教学を勉強しました。卒業後、滋賀県で精神薄弱者、知恵遅れの子供の教育をずっとなさっておられ、日本の精薄教育の権威者でした。ただこういう仕事をなさる方には働きすぎる方が多いのですがこの方もそうでした、50才をすぎて亡くなりました。そしてたくさんの著書を残されました。そのうちの1冊がこの本です。

オレはオレだ

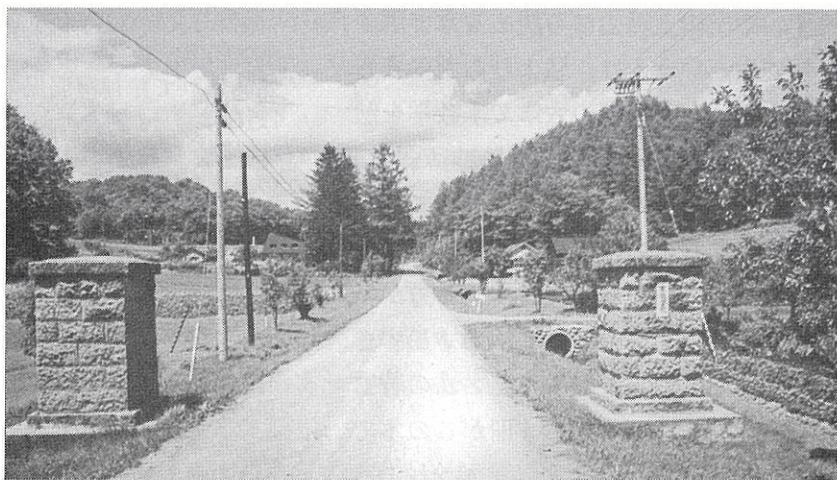
この中に15才の脳性小児麻痺の子どもがでできます。この少年は今では全く身体が動かずに手足が硬直してベッドに寝たきりになっています。彼はいつの頃からか保母さんが、おむつを交換にくると、真っ赤な顔をしてウンウンうなるようになりました。最初は彼が何でうなっているかが、判らなかつたのですが、やがて判りました。彼は両足と肩に力を入れて、腰を浮かして、保母さんがおむつの交換がしやすいようにしていたのです。

保母さんがそのことに気がついた時、糸賀先生の本によると「感動が電流のように保母さんの身体を走った」と書かれてあります。その少年はおそらく小さい時に病気になり、それ以来ずっとベッドの上で考えたことでしょう。「なぜボクはこんな病気になったんだ

京都大学文学部哲学科を卒業後、滋賀県県庁職員となる。戦後、懇請されて精神薄弱児の施設「近江学園」を創設、その後、信楽学園、びわこ学園など数多くの施設を創設。精神薄弱児、重度心身障害児の教育、福祉のパイオニア。

近江学園の歴史を綴った著書の「この子らを世の光に」のタイトルはそのまま児童福祉のスローガンとなった。この子らに世の光を、ではないのである。

この著書の中で「精神薄弱といわれる人たちを世の光たらしめることが学園の仕事である。彼ら自身の真実な生き方が、世の光となるのであって、それを助ける私たちや世の中の人々が、かえって人間の生命の真実に目覚め救われていくのだ」と書いておられる。



北海道家庭学校の正門。まっすぐにのびる道路の左右に寮舎、住宅が点在する。家庭学校につれてこられた少年は、どんな思いでこの門を通るのだろうか。



ナラ、カシワの繁みに囲まれた本館と寮舎。7つの寮舎で、12人の少年たちが寮長夫妻とともに生活をする。

ろう？なぜ他の人でなくてボクなんだろう？」と。くやしくて自分の運命を呪ったこともあったでしょう。時には死んでしまいたくなるようなこともあったでしょう。でも手足が不自由ですからそれもできません。死を志してもそれを自分ですることができないというのは惨めなことです。

おそらくこの少年はいつの頃からか、この苦しさの中から「オレはオレだ」と考えるようになったと思います。「小児麻痺で寝たきりで……オレの人生はこれしかないんだ。そして保母さんの介護を受けている。それならオレにできることは何だろう？」そう考えた結果が、腰を浮かしておむつの交換をしやすくするという事だったのです。

人間は美しい

人間って美しいと思いませんか？神様がいるかないかわからないのだけれども、自分の生きざまをきちんと見出すこと、それを美しいとは思いませんか？

私は家庭学校の子どもたちにそういうのです。こうして窓から外を見ますと、木々の緑の美しさが目にしみます。なぜ木は美しいのでしょうか。ある日、種が風によって飛んできます。そして、とある場所に落ちて、そこで木はしっかりと根をおろして、そこから天に向かって伸びていきます。木の1本1本は自分が種をおろす所を選べるわけではありません。

「もっと日当りの良いところならよかったのに」とか「もっと風通しのよいところの方がよかったのに」とか言い分があるでしょう。

しかし木はその種の落ちた場所で精一杯枝を張り、葉をしげらせるのです。ですから木は美しいのです。(注⑦)

自分の運命を愛せるか

家庭学校では日曜日ごとに礼拝をしています。それはみんなキリストを信じてクリスチャンになってほしいと、必ずしも思っているわけではないのです。日曜日ごとに礼拝堂に集って、固い椅子にすわって、そして一人一人が自分の生きざまのようなもの、「オレはオレで精一杯生きるんだ」ということを学んでほしいと思っているのです。

「運命愛」という言葉があります。自分の運命の前に立ちだかかって「どうしてこんな貧乏なんだろうか」とか「どうしてこんな親の所に生れたのか」とか運命に向って文句を言っている間は、運命というものはカサカサしたものなのです。しかし自分の運命を愛することによって、はつらつとしてくるのです。

そういうことを少年たちに学んでほしいのです。すると彼らはこう言います。「ボクたちは人間だよ。木じゃないよ。木は選ぶことができないけれど、人間は選ぶことができるはずだよ……」そうです。人間は自由です。

注⑦ 星野 富弘さんの詩にこんなものがある。

木は自分で
動きまわることができない
神様に与えられた その場所で
精一杯枝を張り
許された高さまで
一生懸命 伸びようとしている
そんな木を
私は友達のように思っている

(星野富弘著「風の旅」より)

選択の可能性があります。けれど不思議なことに自由に選択の可能性があることだけが幸せではなくて、これと定めたことを自分に与えられたことと信じて、大切に育てていくこと、その中に本当の幸せがあると、私は考えています。

子どもの言い分

今日の講演はいつも私が家庭学校で少年たちに向って話をしていること、「心を問い続けて」ということなのですが、みなさんの前で、教育の現場のご報告をするようなつもりでお話ししています。

子どもが色々な関係機関からもってくる書類をみますと本当にたくさんの方がいます。シンナーがあるでしょう。窃盗があるでしょう。その他いっぱいあります。

そのケース記録では、そのことを子どもが反省しているか、罪の意識があるか、罪障感があるかということに非常にしつこく問うています。

罪の意識があって、反省心があれば、これからの立ち直りに大事な足掛りになるというわけです。

私の見るところ、子どもにはそれがないのです。全くないわけではないでしょうが、罪の意識や反省心よりは、彼らには「言い分(いいぶん)」があるのです。

たとえば「オレの親父はいつも冷たい目で

オレを見ていた、小さい時からオレはとうちゃんの暖かさなんて知らん」とか、また別の子どもは、おじいちゃんおばあちゃんと暮らして、「とうちゃんかあちゃんは生きてるらしいけれど、ただそういう噂しか聞いたことはない」その他色々です。ほんとうにいっぱい「言い分」があるのです。そういう少年たちと話をしていると、私達も考えてしまいます。「こんな惨めな幼年時代を過ぎてきた子どもが実際にいるのか」と。

子どもこそ被害者

少年はまぎれもなく被害者なのです。少年たちは問題を起し、事件を起して「加害者」になったから家庭学校にやって来ました。しかし、彼らの生れ育った家庭環境を調べてみると彼ら自身が「被害者」であることがよくわかるのです。

ですから罪障感や反省心よりも「言い分」があるのです。そして子どもの「言い分」はおとなの社会を根底から揺るがすような、非常に鋭いものです。

でも私はこういいます。「じゃあ、とうちゃんが悪かったのか？かあちゃんが悪かったのか？君は父さんを責め、母さんを責めるけれど、もし君が父さんにそう言ったら、父さんはそのまた父さんの苦勞を言うかもしれない。母さんだってそうかもしれない。人間の社会は不思議なもので、不幸はいつも不幸を

生むんだ。鎖みたいなの悪循環なんだ。貧乏はいつも貧乏を生むんだ。ずっとつながっているんだ。だからもし君が自分のことを不幸だと思ったなら、少なくとも君が原因になってもう一つの新しい不幸を生む事だけはやめよう」こう言うのです。

これは仏教のほうで「因果を切る」という大変強い言葉があります。

考えてみれば、「言い分」があるというのは、どこかで相手を許していないのです。父さんを許していないし、母さんを許していないのです。また先生を許していないから「言い分」があるのです。もしちょっと気を変えて、父さん母さんを許す気になったら、今まで「言い分」だと思っていたことが、自分勝手なただの「へ理屈」だと思えるようになってくるのです。

人を許す心

父さん母さんを許す、人を許すということは、「言い分」がなくなって、自分は今までなんてわがままだったのだろうと、気が付くことです。「父さんは苦勞したんだなあ、かあさんは大変だったんだなあ、とちょっとでも思うことができたなら、君の言い分なんてきっとなくなるよ」というのです。

憎しみの気持ほど祈りの気持から遠いものはありません。許すという気持が、一番信仰に近いのです。家庭学校でのおよそ二年間の

間に私は子どもたちにそれを学んでもらいたいと思っています。

これも、ある日の礼拝でお話しというよりは、ほとんどお願いという気持ちで言ったのですが「大人の我々が出来なかったことを君達にしてほしい、因果を絶ち切ってほしい」と言いました。

不幸に負けた子どもたち

家庭学校にはいつもたくさんのお客さんがきます。北海道という立地条件もあるのでしょう、75年におよぶ感化事業のメッカということもあるでしょう。そしていらっしゃるお客さんが、「家庭学校ってどういう学校ですか？家庭学校の子どもってどういう子どもですか？」と聞きます。子どもたちも私がそれにどう答えるか気にしています。私はその質問に「家庭学校にいる子どもは、不幸な子どもです」と答えます。どの子ひとりをとっても「アイツは幸せなヤツだ」という子はひとりもいません。

しかしもうひとつの大切な事実は、家庭学校の子どものは、「不幸に負けた子だ」ということです。十分に不幸でその上不幸に負けた子なのです。不幸に負けたことが悪いとか、いくじがないとか、そんなことじゃなく、事実としてそうなのです。

広い世の中には同じように苦しい目にあって、いやもっと辛い目にあって、がんばって

いる勇気のある子がたくさんいます。「キミはこういう辛いことがあった、こういう不幸があった。そしてそれに負けたんだキミは」私は子どもにそういいます。

見学に来るお客さんには「ここにいるのは不幸にして、その上、不幸に負けた子がいます。そしてここでは、自分が不幸に負けたことを言い訳しないで、また人を許すことができる子ども、そんな子を育てていきたいと思っています」と答えています。

目をつむって見えてくるもの

「祈りってなんだ？」よく子どもが私に聞きます。礼拝堂に入ってきて、「さあ祈ろう」という時に、しっかり目をつむりなさいといえます。目をつむると帯広にいるお母さんの顔が浮んできます。また札幌の労災病院にいるお父さんの姿が浮んできます。もっとずっと目をつむっていると、小さい時の自分の姿が見えてきます。また大きくなった時のことも見えてきます。不思議なことに時間的にも空間的にも世界が広がっていくのです。

何が大切かと言うと、その時間的空間的に広がった世界の中で、自分はどう生きるかを考えることです。自分はどう生きるか、自分とあのかあちゃんをどう切り結ぶか、病院にいて再起不能のとうちゃんとうやうや生きていくか、また自分の小さかった頃、そして自分の将来……その時間的空間的に広がった

世界の中で、自分は一体どうしたらいいのだろうか、そういうことを考える、それが大切なのです。それが祈りなのです。目を開けるとすうっとそれは消えていきます。目を開くと見えなくなるのです。

「一日に一度、一週間に一度、いや一カ月に一度でもいいから、静かに座って、じっと目をつむって自分の位置を確かめてごらん」と言います。こんな話しをしていると、子どもたちは「谷校長は、なんかちょっと変わったことを言っているぞ」と気が付きます。「目をつむると見えてきて、目をあくとも見えなくなるなんて」と思うわけです。

実は祈りとか宗教とかいうのは、常識と逆のことがあるのです。その逆の世界の中で、自分のあり方を考えてみてほしいのです。目をあいていては見えない世界、その世界の中で自分と対決してほしいのです。これが非常に大切なことなのです。

両親は仲良く

私はいつも家庭学校の子供に自分で読んだ本の紹介をします。義務教育の年令の中学生もいますから、勉強させなくてはならないわけです。

ある日、関西の東井先生（注⑧）という方のお話しをしました。東井先生が母親学級でお話しなさいました。「家庭ではお父さんとお母さんは仲良くしてください。子供を育て

るには、ふたりの協力が必要です。そうして初めて子どもが真直に育ってきます。お父さんを大切にしてください。お父さんをたててください」。これはあたりまえのことですが、東井先生がそうおっしゃいました。

講演が終わってから、ひとりの中年の婦人が先生の所にやってきて、涙ぐんで「今日が良いお話をありがとうございました。でも私の家には仲良くしたくても、主人はいません。たててあげるお父さんがいないのです」と言いました。母子家庭なのです。何百人かのお母さんが集れば、何人かの、生別か死別かはわかりませんが、ご主人を亡くされた方がいらっしゃるの当然です。そこで東井先生はハッと気がつかれ「私はご不幸なお母さんのお心を傷つけたことをおわびいたします」とおっしゃり、また「それはそうですが、この作文を読んでください」といって、小学校4年生の亮太君の作文をわたされました。そこには「お母さん」という題で次のように書いてありました。

亮太君の作文

「ボクのとうちゃんはボクが小さい時に死にました。けれどどこかからボクのすることを見とるんや、とかあちゃんは言います。かあちゃんは怒ってボクの頭ををたたく時『これはとうちゃんのかわりにかあちゃんがたたくのや』といます。かあちゃんはいつも働

をどう生かすか」を求めつづける。敗戦後、教師の戦争責任を痛感し、へき地に赴く。

教科と生活の論理の融合をめざしたユニークな教育実践を展開、数多くの賞をうける。姫路学院女子短大、兵庫教育大学の講師をへて八鹿小学校校長を最後に退任。「東井義雄著作集」がある。

注⑧ 東井義雄(とおいよしお) 教育者。1912(明治45)年、兵庫県生まれ。姫路師範学校を卒業し、小学校教員となり、生活綴方教育運動に参加。「子どもら

いているので、家に帰るのが遅くなります。とうちゃんの分も働くからです。夕方になってボクが戸口の所で待っていると、かあちゃんは帰ってきて、ボクの頭をなでてくれます。

ボクはうれしくなって『とうちゃんの分もなでて』といいます。するとかあちゃんは、『よしよし』といってなでてくれます。この間の晩に、ボクが宿題をやっていると、かあちゃんが『亮太は勉強が好きになったで、ええなあ』といました。『ちがう、きらいや』という『勉強の嫌いなもんは偉いもんになれせん』とかあちゃんがいました。『それならボクのクラスではケンちゃんが一番偉くなるのかよう、なら、偉いもんなんかになりたかねえ』と口答えをしました。ケンちゃんは勉強はできるかもしれないけれど、いばるからきらいです。すると、かあちゃんはブスツとしてしまいました。ボクはだまっていたが、かあちゃんが何もいわないのでだんだんつらくなりました。ボクはかあちゃんの所へ行って『かあちゃんボクをたたいて』と頭をだしました。するとかあちゃんは『もうええから勉強しな』といました。『そんならとうちゃんの分たたいて』といました。そしたら『ようし』といってかあちゃんは笑いながら、ボクの頭を一つコツンとたたきました。ボクはうれしくなってまた勉強をやりました。ボクはかあちゃん大好きです。」
亮太君の作文はこういうものです。

これをその母子家庭のお母さんに読んで

らって、東井先生は「どうかこれからもご苦労が多いでしょうが、死んだお父さんを生かすお母さんになってください」といってお願いをしました。

両親のいない子

こんな話が先生の著作集にあるのですが、そんな話をすると家庭学校の子どもはシーンとして聞いています。けれどある子が言いました。「ボクにはとうちゃんもかあちゃんもいないんだ。とうちゃんもかあちゃんもいないボクらは一体どうしたらいいんだ」と。

そうなのです。家庭学校には両親のいない子どもがたくさんいます。普通の学校だったら、1クラスに一人か二人、あるいはゼロでしょう。家庭学校の場合は85人のうち15人も20人もそんな子がいます。

なぜ家庭学校に来るかといえば色々いたずらをするからなのですが、子どもに非行があったからというだけで来るのではないのです。もし子どもに非行があったら即、家庭学校に入れろというなら、玉の川学園や愛知学園や家庭学校は他に十も二十も必要です。

今、社会では子どもの人権を大切にしようときかんに言われています。子どもの人権を大切にするというのは、子どもをそういう所へやらないということなのです。

生きる意味を考える

私は少し考え方が違うのです。「人権って何なんだろう、権利って何なんだろう」と考えてみますと、それは英語を考えてくださればわかります。「正しさ」なのです。人権を大事にするということは正しさを求めていくということです。

何が人生で大切なのか、人間、いかに生きるか、そういうことを考えるのが、人権を大事にすることです。

子どもの人権を大事にしたいなら、僕のところへよこしてください。トコトンひざを突き合わせて、生きる意味を考えてみます。それが人権を大事にすることです。そう私は思います。

これは私のような仕事をしている人間の独り善がりかもしれません。やはりあのような所にやらないのが子どもの人権を大事にすることなのかもしれません。

非行があった子どもの中で、よくよく家庭に看護能力がないと見なされた子だけがはいてくるのです。ですからうちの少年諸君はいささか悪いことをしたとは思っていますが、それ以上に、「先生、みんなもやっているよ」と思っています。確かにそうです。たくさん子どもがいたずらをしているのですが、そのうちの看護能力のない家庭の子どもだけがくるのです。

その結果、85人の子どもがいますと15人も20人も両親がいないという、かたよった子どもの集団になるわけです。



牧草刈り。留岡幸助の提唱した「よく食べ、よく働き、よく眠る」の三能主義にもとづき、さまざまな生産活動が行われている。酪農はもっとも歴史が古い。



スキー。広大な敷地をスキーで一周すると、半日はかかる。

亡き親を生かす子どもに

私は家庭学校の校長ですから、そういうことはよく知っています。知っていてなお「とうちゃんとかあちゃんは仲良くしろ」とか、「とうちゃんをたてるかあちゃんではなくてはならない」とか少年諸君に言うわけです。

先ほどの東井先生が母子家庭のお母さんに謝った時のように彼らに謝まらなくてはなりません。

けれど両親のいないその少年たちにむかって、私は両手を出させて、「この両手は誰からもらった?」と問います。「その右の手と左の手は、まさしくとうちゃんかあちゃんが残していったものだよ。何かうれしいことがあった時は、両手を胸に置きなさい。何か悲しいこと、辛いことがあった時、悪いことをした時は、両手をこぶしにして、頬を思い切ってひっぱたきなさい。君達の両手は、まさしくとうちゃんかあちゃんが残していった、とうちゃんかあちゃんそのものなんだよ」と言うのです。

うれしい時も、悲しい時も、間違った時にも、どんな時にも、少年たちの両手は少年たちと共にいます。

先ほどの東井先生が母子家庭のお母さんに、「死んだお父さんを生かすお母さんになってください」とおっしゃったように、私は少年たちに「今はいないとうちゃんかあちゃんを生かす少年になってほしい」と心からお

願いするのです。

貧乏より金持がいいに決まっているけれど、金持なら必ずしも幸せではないのと同じで、両親がいないよりはいたほうがいいに決まっているけれど、両親がいれば幸せで、両親がいないから不幸せだと、決っているものではありません。

一人一人が与えられた運命の中で、自分で自分の生き方を創造していかなければならないのです。

誘惑に負けないで

随分むちゃなことをうちのチビスケたちに要求していると思いながら、しかしそれ以外に、子どもたちひとりひとりが自分を築いていく道はないと思うのです。

次に読みます作文は「僕の家族と、これから目指すこと」という題で書かれた、うちの中学三年相当の子どものものです。

「僕の家族は全部で五人います。家族のことを一人ずつ言うと、まず父さんは、僕が六年生の時にいなくなり、一度家庭学校に来ただけけれども、また行方不明になり、僕の前には現れませんでした。

母さんは、いま富良野へ農家の手伝いに行っています。母さんは父さんがいなくなってから、ずっと僕達三人を育ててくれました。でも僕は父がいなかったためか、いじけてしまい、悪いことをしてしまいました。自分が悪

いことをするということが一番母さんを苦しめることだということは解っていたのだけでもしてしまいました。今では悪かったと思って本当に後悔しています。

僕の兄弟は三人で、僕のほかに弟と妹がいます。弟は中学一年で今、新聞配達をしています。弟は三年生からずっと新聞配達をしていました。僕もいっしょにしていたのですが、家庭学校に入ったのでやめました。

でもその時のことを思い出すと、今の弟の新聞配達のが苦しさがよく解ります。一番厳しかったのは冬で、あの寒い吹雪の中を、そりをひいて一軒一軒まわって歩く、時には冷たくて投げ出してしまおうと思ったことが何度もありました。それを思うと今の弟の苦しさがよく解ります。

妹が盲学校に入ったのは、だいぶ小さい時で、忘れてしまいました。でも五年以上は確かです。いま妹の目は左目の角膜がおかしくなって白いものがかぶさって左目はほとんど見えないという状態です。でも右目のほうがだいぶ見えるので今は右目で見ています。

でもやっぱりこの中で苦勞をかけたのは母さんです。いつも僕が悪いことをすると泣いて謝ってくれます。そんなことは知らずに、僕はどんどん悪いことをしていきます。また僕が家にいた時は、弟を毎日のようにいじめ泣かしていました。今ではそんなことをして、とつてもすまないような気でいっぱいです。もうこれからは悪いことをせずに、真面

目にして、小さいものをいたわり、母さんに恩返しをしてあげたいです。

僕はその恩返しをするのは、やっぱり社会に出て、りっぱな人間になることだと思います。そのためには毎日毎日いっしょうけんめいがんばり、信用のつく人間になることです。

でも一年前の夏休みに大失敗をして、家庭学校にドロをぬり、先生方には信用を失ってしまいました。生徒たちには大迷惑をかけてしまいました。それからずっと失敗したことを後悔して、がんばってきました。

そして一年後の僕はもう信用をとりもどし、真面目になりました。

先生がよくいうことで、竹というのはある日を迎えると、一節づつできて強くなっていく、人間もそれと同じように、ひとつひとつ積み重ねていかななくてはならない、もしそれが途中で崩れたら、いちからまたやり直しになってしまいます。

また先生はこういうこともいいます。1 + 1 = 5 になるということです。それはひとつのことを一人がする時に、そのやり方によっては三倍にも五倍にもなるということです。今、自分の欠点はワンテンポ遅いということです。その次には10の仕事をして2つか3つはぬかしてしまうということです。

家庭学校でその欠点をなおして、社会にでたら、誘惑に負けないでがんばっていきたく思うのです。僕は社会にでても、これらのことを決して忘れずに、がんばってやっ

きたいと思います。」以上です。

これは礼拝の前に月に1回、朗読会をするのですが、その時にある子どもが読んだ作文です。

家庭であり、学校でありたい

家庭学校というのは、家庭と学校だというわけです。家庭の愛に溢れて、学校の知恵に満ちた所、家庭であって学校でありたいと、創始者である留岡は考えました。

それが次のような形で、あらわされています。家庭学校は全寮制ですから、先ほどから申しますように、広い森の中に点々と小さな寮が建っていて、そこに夫婦の職員が住んでいます。そして12人くらいの子どもと、いわば大家族を形成しています。それが7つあります。12人の子どもはそれぞれ起居寝食を共にしますから、24時間、365日、夫婦の職員と子どもは一緒です。(注⑨)

おそらく家庭学校という夢は寮という形にあらわれています。朗読会ではその1つの寮から1人の子どもが出てきて先ほどのような作文を読むわけです。するとフロアにいる教師がそれを聞いて色々な感想を述べるわけです。

それから礼拝が始まるわけです。私が壇上に上り、私も7人の子どもの作文の感想を述べてから、聖書を読み、讃美をして終わります。私は子どもたちの作文を読むのを聞いていると、それは子どもたちの祈りのような気がし

ます。私は先ほどの作文を読んだ少年に、次のような話をしました。

責任の自覚

「私はあなたの作文を聞いて『お父さんはどうしておられるのだろう』と思いました。富良野まで働きにいらっしゃるお母さん、雪の中をそりをひいて新聞配達をしている弟君、盲学校にいる妹さん、みんなが苦勞しています。お父さんはどうしておられるのですか？私は大人の一人として、いたたまれない気持ちで考えます。あなたもきっと、すごく残念な思いで考えていたことでしょう。だからあなたは『えーい勝手にしろ、どうにでもなればい』とヤケになって、いらだって、調子を崩してしまったのです。

しかし今のあなたは違いますね。お父さんはお父さんの道を歩いているのです。お父さんが力になってくださらないなら、それだけ自分は長男としてがんばらなくてはいけない、と固く決心しています。君がやぶれかぶれな気持ちになり、弟さんを泣かしたり、君のためにお母さんが謝ってまわっていた間は、あなたにはお父さんを批判する資格なんかありませんでした。今やあなたは長男として大きな責任を背負って行こうと固く決心しています。

今こそあなたはお父さんを批判する資格があるのです。

酪農、山林、醸造など多岐にわたっている。

腹がへれば、子どもは悪いことをしてかす。自然は、春芽ぶき、冬になれば葉を落して眠る。自然の一部としての人間にも、よく眠ることは必要である。夜遊びと朝寝坊のくりかえしでは、健康な生活とはいえない。健康な生活は人間を変える。そういう信念のもとに家庭学校は運営されている。

子どもは変わっても、休みのない職員やその子どもは大変である。

注⑨ 北海道家庭学校には、広大な敷地の中に、7つの寮があり、職員夫妻が寮長となって運営されている。

留岡の提唱した「三能主義」、すなわち、よく働き、よく食べ、よく眠るにもとづいた生活を実践する。学令にとらわれず本人の理解程度に応じた学習とともに、自分の身体を動かして労働にはげむ。

職員と少年たちが一体となって繰り広げる生産活動は、そ菜、園芸、果樹、木工、土木、板金、

しかし大切なことは、あなたにその資格が生れた時には、あなたにはすでに、お父さんを批判しようという気持ちがなくなっているという事実です。

五十歩百歩の者どうしが、とかく非難するのです。先生の教えを忠実に受け入れようとしている君、これからも一段と進歩するでしょう」。

この少年の父親に問題があることは事実です。ただ当の本人が「父親が悪い」と思っていると、当の本人がダメになってしまうのです。これは不思議なことです。父親が悪いということは一つの事実です。この少年もそう思っている間はダメだったのです。しかし遠くから父親を見て、また家庭を見ているうちに、父親をあしざまに罵っている、そのとおりのことを、あるいはそれに近いことを自分がしていることに気が付いたのでしょう。心理的な成長があって、少なくとも彼が読んだ作文には、父親をとがめだてするような言葉はひとつもうかがえませんでした。そのことが私を喜ばせました。

少年の大失敗

彼の作文は彼の決意を表明していて、大変すばらしいものですが、もうひとつこの少年といっしょに考えなくてはいけないことは、「僕は去年、夏休みに家に帰って大失敗をしてしまいました」というところです。そして

家庭学校にドロをぬって、生徒たちには迷惑をかけて……と大変恐縮しています。

これは何があったかといいますと、万引きをしたのです。わずか二週間の休みでしたが、家に帰った時に万引きをしてしまったのです。

今は日本の社会は大変豊かになって貧乏というのは少なくなりましたが、この少年の家はもう大変な貧乏です。町外れに約3メートル四方の小屋がポツンとあります。裸電球が一個天井からぶらさがっています。それだけのほんとうに貧しい家です。そこへ彼は帰りました。そこは彼が生れ育った家ですから、その貧しさはよく知っているはずで、ところが彼は半年間、家庭学校で生活したその後で家に帰ったのです。

今の社会福祉施設はかなり充実していますから、生活のレベルはかなり高いのです。三度三度きちんとカロリー計算された食事をとることができますし、食堂にはカラーテレビがあるし、まあ人並みの生活はできます。そういう人並みの生活をした後で、自分の家に帰ってみると、彼はその貧しさにびっくりしたのでしょうか。

その裸電球の下で、目の見えない妹がいます。彼はその時にラジオがほしいと思ったのです。せめてラジオがあれば、目の見えない妹が喜ぶだろう、と思ったのです。

そう思いながら街を歩いていました。そしてたら電器屋さんがあって、トランジスタラジオがあって……気がついたら、その店に入っていて、そのラジオを手にしていて、というのです。彼は現行犯で捕まえられました。

「先生ほんとだよ」と彼がいますのは、始めから盗むつもりで計画的に街に行ったのではないということなのです。ほんとうにそうだと思います。どう考えても「でき心」でしたのです。私はそれがよく解ります。

しかし私は大声で「馬鹿者！」と叱りました。「馬鹿者！気がついたらよその家に入っていて、ラジオを盗んでいたなんて。そんな言い訳はどこにも通用しないぞ！」と言いました。彼がほんとうに盗む気持がなかったことは解りますが、だからといって、それならよろしいとはいえません。

悪を正当化してはいけない

私達はいつも目覚めていなくてはなりません。悪いことだと知っていてもフラフラとしてはいけません。

「人間は悪と知りつつ、悪をおかすことはできない」といわれます。「そんなことはないよ、みんな悪いと知っていて悪いことをしているよ、政治家なんかそうだよ」と反論されるかも知れません。しかしこの言葉はそういうことではないのです。

悪いということは知っているのです。知っ

ているのですが、いつの間にか、その悪を正当化する理屈をいくつも作っているのです。「誰だってこんなに追い詰められれば盗みぐらいするよ」というような理由をつけるのです。でもそれをした途端、すぐに気がつくのです。だから絶えず目が覚めていることが必要なのです。

私は少年を叱りながら「なんて教師はえらそうなことを言うんだろう」と自分で思いました。ほんとにこの少年の言うとおりのことです。でもこういう時は叱らなければなりません。ですから、自分をも叱ったわけです。

こういう中で日曜日ごとの「祈り」の場所で、誰かに見られている自分たち、誰かがみんな心得ておられる自分のこと、その方の存在を考えてもらいたいと思っています。

今、高等学校の進学率が94%になりますし、多くの方が大学に進学しています。そんな中で、昔は感化院といわれ、今は教護院といわれる私達の学校の子どもは「感化院に行った子ども」というレッテルを貼られてしまいます。いったん貼られてしまいますとその先は非常に難しいのです。しかしその厳しさに負けてはなりません。そう思いながら生活しています。(注⑩)

不良にだけはなるな

去年の暮、私達の学校で若い一人のお客さんをお迎えしました。その人は大阪の人で田

注⑩ 教護院に入った少年は、通学できる家庭環境がととのい、在籍していた学校が復学を認めない限り、教護院を「卒業」することができないし、復学は実際むづかしい。高校進学は皆無に近い。

中久夫さんといいます。(注⑩) 35才の田中さんは御存じの方もおいででしょうが、大阪で「百円ラーメン」をしていらっしゃる方です。

彼のことを書いた本があります。(注⑪) 彼は高知県の生れです。高知県、足摺岬の寒村の貧乏な家に生れ育った少年です。三人兄弟の真ん中で、小さい頃から悪いことをすると、お母さんが「不良にだけはなるな、かあちゃんはおまえたちを不良にするために生んだんじゃない」とよく叱ったそうです。

二才上のお兄さんは中学を卒業した段階で「オレはもうひもじいのはイヤだ」と言って鯉の一本釣りの船に乗り込みました。土佐ですからね。昭和40年代の初めの頃、中学卒業しての初任給が、一万五千円から二万円の頃、この十五才の少年が鯉船にのると、五万円にも六万円にもなったのです。

土佐は台風の通り道です。ある台風の日でした。雨が降って風がひどく、竹藪の竹がなくなって、畑の土を履いてしまうような日でした。「ひさおー」とお母さんが彼をよぶ声が畑の方からします。見ると土砂ぶりの雨と風の中で、お母さんが畑の中で草をむしっているのです。彼は行って「何でこんな嵐の日に、草むしることはないだろ？」と聞きました。するとお母さんは「今、このひどい天気の中で、にいちゃんは船に乗っているんだよ。そのこと考えたら、畳の上でじっとなんかしてられないよ。たのむからおまえ達もここにきて草むしり手伝っておくれよ」とい

注⑩ 田中久夫(たなか ひさお) 百円ラーメン 大阪飯店主人。1953(昭和28)年の生れ。中学校卒業とともに集団就職で大阪へ。三度の転職のあと、中華飯店に就職し、修業をつむ。1984(昭和59)年、独立して大阪飯店を開業。大阪市西成区汐路に店がある。

注⑪ 西垣戸勝著「百円ラーメン哲学」(論創社・刊)

うのです。お母さんは髪も乱れて、まるで、幽鬼のような姿です。

そういう家庭に育って、この兄さんと久夫さんは大阪に出ます。大阪に出て働き始めます。ふたりの家は貧乏ですから、ふたりとも給料は全部、家を送ってしまいます。御飯は会社の寮で食べます。ところが会社の寮は月曜から金曜までしか食事が出ません。土曜と日曜は何も食べられませんから腹が減るわけです。腹が減って、フラフラ歩いていたら、先輩から「なんだ、若いくせに、そのだらしのない歩き方は」といわれました。その先輩はふたりから話を聞いて、ただ一言「今晚オレの家に来い」といいました。

そしてその夜、先輩の家に行くと釜一杯の御飯が炊いてあり、なべ一杯のカレーが作ってありました。そして「いいから、食え」といわれ、兄弟はたちまちそのカレーを平らげてしまったそうです。

100円ラーメン

学歴のない人間がチャンスを作るのは、食べ物屋が一番だと思い、この久夫さんは中華料理店でいっしょうけんめい修行をし、やがて32才の時に大阪飯店という、名前は大きいのですが、ほんとうに小さいお店を出してそこでラーメンを100円に出します。まずいラーメンを100円で売り出しても、たいしたことはありません。けれどこのラーメンは

違います。いろいろ工夫してだしを作り、麺を吟味して、ものすごくおいしいラーメンなのです。

大阪朝日の記者が「なんと今時 100円ラーメン」という報道をしてから大変有名になりました。東京でも「天声人語」に紹介されて、知られるようになりました。今でもまだ 100円です。このたびの消費税でどうなったでしょうか。たぶん 100円でやっているでしょう。

普通は食べ物屋は小さい子どもの客は嫌います。時間ばかりかかって、テーブルのまわりは汚すし、いやがるものです。ところがこの田中さんの店に行くと、100円玉を握った小さい子どもがいっぱいいます。

ある日遠くの店から、同業者がやってきました。その人は 100円ラーメンを食べて、そのうまさに驚き「いや、よかった、もしこんな店が近くにあったら、お客はみんなとられてしまうよ、うちは遠くでよかった」と言ったそうです。同業者にそんな風に誉められるくらいにその 100円ラーメンは美味しいのです。田中さんは小さいときから、たくさんの人にお世話になった御礼に、100円ラーメンを続けていると言っています。

中味で勝負

その田中さんが去年、家庭学校の子どもにその 100円ラーメンを、ご馳走してくれたのです。大阪から羽田、そして女満別と飛んで

きてくれました。女満別の空港に彼を迎えにいくと、彼は大きなビンを大切そうにかかえていました。だしが入っていたのです。

その晩、私の家に泊っていただいて翌日、いよいよ調理室に立ってくれました。見ていますとだしにつかう人参や玉葱は皮のところを使います。100円で作ろうと思ったら、やはり、切りつめられるだけ切りつめなければなりません。

そしてうちの子どもたちに美味しいラーメンを振る舞ってくれました。

その後で彼にお話をしてもらおうとしました。彼はたった一言「喜んでくれてありがとう」と言ったきりでした。そして「ハーモニカを吹かせてください」と言ってポケットからハーモニカを出して吹きました。

私はその演奏を聞きながら、田中さんはうれしい時も悲しい時も、いつもこのハーモニカといっしょだったのだろうか、と思いました。

これは田中さんを私の所に紹介して、遠軽までつれて来るという骨をおった人に聞いたことですが、田中さんのお店に、ある企業のトップの人が来たそうです。そして店の隅で 100円ラーメンを食べました。

そして「私は電話一本で何億ものお金を動かすことができる。しかしこの青年は 100円の美味しいラーメンを作るために精魂を傾けている。それを思うと、自分のやっていることが空しくなってくる」と涙を流して言った

そうです。

私は、自分のやっていることが空しくなると言ったこの企業のトップの人も、さすがだと思いました。

そうです。中味で勝負、なのです。学歴なんか関係ありません。

本物の生き方をしたい

「心を問い続ける」ということなのですが、およそ信仰、宗教、真実、それらを問い続ける我々は、本物の生き方をしたいと思うのです。ちがいますか？

そしてここ名古屋学院大学に、こうしたチャペルがあるということ、これは名古屋学院大学の誇りでなくてはなりません。この礼拝堂が大学の中でどれだけ浸透しているか、ただの飾りになっていないか。それらは絶えず問われ続けなくてはなりません。

そしていつも少数の人間の側に真理があって、その少数の人間はいつも忍耐しているのです。これが大切なことです。

そしてその少数者がいること、正しい一人の人の祈りが国を支え、世界を支えている、これが旧約聖書以来の信仰です。

どうか正しき者の祈りがこの名古屋学院大学を内から支える、といったものであってほしいと思います。おそらくここでのチャペルアワーや、春と秋の宗教週間の企画などは、そういう願いをもって続けられていることで

しょう。

冒頭に申し上げましたように、志を持って大学生が集ってきているこの名古屋学院大学と、まるで雑巾が捨てられるように集められた少年たちの北海道家庭学校は、大きな隔りがありますが、根底には通じるものがあると思われるのであります。

写真と資料提供・北海道家庭学校
表紙カット作成・武岡 基 (92E)

1989 春の宗教週間ご案内

◆宗教講演◆

心を問い続けて

とき 5月16日(火) 午後1時50分
～3時20分

ところ 本学チャペル

講師 北海道家庭学校校長

たに まさ つね
谷 昌 恒 氏



北海道家庭学校は、シンナー、万引き、暴力、窃盗など問題を起した少年たちを受け入れる「教護院」です。

谷昌恒先生は、校長として20年間、不幸に負けた少年たちと一緒に生活しておられます。谷先生は、東京大学理学部を卒業された地質学の研究者でしたが、敗戦直後の混乱の中で戦災孤児たちと出会い、一身を投じて福島山奥に、堀川愛生園を設立、以後一貫して福祉と教育の道を歩みつけておられます。

北海道家庭学校は、1914年留岡幸助牧師が網走の近くの遠軽町に創設したキリスト教主義の学校で、厳しい自然と労働と祈りによって、心に傷を負った少年たちを立ち直らせてきました。「いつの場合でも、ダメと思っちゃったらもうダメ。いついかなる時にも可能性を信じ、願ってやるのが大切なんです」と谷校長は言われます。

主催 名古屋学院大学 宗教部

チャペル ブックレット 発刊にあたって

本学の開学(1964年)以来、宗教部では毎年、春と秋に「宗教週間」を設けて、折りにかなったテーマと講師を与えられて、学生諸君と共に学んでまいりました。

その講演内容は、宗教部の機関紙「麦粒」に掲載してまいりましたが、貴重な講演を、いつでも手にとって読める形にまとめてはどうかとの提案を受けて「チャペルブックレット」として発刊することにいたしました。

このチャペルブックレットが、本学の学生諸君をはじめ、多くの方々に刺激を与え、問題を提起し、より深い認識と行動へかりたてるきっかけになることを願っています。

1989年11月

宗教部長 梶原 寿

チャペルブックレットNo.2

1990年3月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部

瀬戸市上品野町1350

〒480-12

TEL 0561-42-0348

印刷 坪井印刷合資会社

2,000

チャペルブックレット

●既刊

- No.1 経済の論理と人間の論理
—— エコノミック アニマル日本 ——
恵泉女学園大学教授 塩 沢 美代子
- No.2 心を問い続けて
北海道家庭学校校長 谷 昌 恒
-

●近刊

- No.3 国際化時代におけるキリスト教の使命
—— 韓国の視点から ——
梨花女子大学教授 徐 洸 善